

都高 P 連会報 増刷版 「事例発表」

この増刷版は本年度事業として、「各学区や単位 PTA の取り組み事例」を全都会長会で発表、併せて会報でお知らせするものです。是非今後の活動にお役立てください。(2005年12月16日 全都会長会発表)

第5学区 「高校生の金銭感覚と男女交際」 - 親と子の認識の比較について

発表：日本橋高校 会長 大木 竹美



今回の研究発表のテーマは、高校生の子どもの持つ親と子ども自身の一番身近な問題ではないかということで取り上げました。子どもはこうあってほしいと思う親の願いと今高校生活を送っている子ども達の考え方にはどのくらいの差異があるのか、また、親と子がお互いに相手の立場においての考えを知ることは家族のあり方を考える上で役立つのではないかと、ということでアンケートを取ることにしました。

《アンケートを集計してみて》

* 食事に関すること

- ・ 共働きの家庭が多いなか、1日1回は一緒に食事をするという答えが多く、お弁当も半数以上が持参している。中には自分で作っているという子どももいた。

* 金銭感覚について

- ・ 一ヶ月に必要なと思う小遣いの額と実際の額について、保護者の回答ではほぼ同じ様な金額になっているが、子どもは必要だと思う額がかなり高額となっていて実際にもらっている額との格差が大きかった。
- ・ 子どもの財布の中身については知らないと答えた保護者が過半数で、お金の管理を子どもに任せている保護者が多いと思われる。子どもが実際に持っている額は必要最低限(昼食代など)に収まっていて、1万円以上という答えは少なかった。
- ・ アルバイトは原則的には禁止のなかでしている子どもが予想以上に多かった。子どもがアルバイトをする目的については、保護者の認識と子どもの回答がほぼ一致していた。小遣いの使い道についても、保護者と子どもの回答はほぼ同じであり衣類・化粧品代・飲食代などが多かった。しかし、貯金・家計のためと答えたのが保護者3%に対し子どもは10%以上あり、保護者が思うよりもしっかりとした金銭感覚を持つ子どももいるということがわかる。
- ・ お金のことについて家族で話すという家庭が多かったため、このことは親子の関係を深める接点にもなっているのではないかとと思われる。

* 男女交際について

- ・ 交際相手がいるかいないかということについては、保護者も子どもも殆ど同じ回答になっており、保護者は子どもの交際相手について把握しているようだ。しかし、性体験があるかという設問になると保護者が考える以上に「性体験がある」という答えが多く、学年が上がるに連れパーセンテージが高くなっている。
- ・ 高校生の性体験について「よいと思う」という答えと、前述の「性体験がある」という答えのパーセンテージがどの学年でも一致している。実体験のある子は高校生の性体験を肯定する傾向があるのではないかとと思われる。
- ・ 性の知識について保護者は正しい知識を教えるべきだと思っても、なかなか子どもと話ができないという現状が見受けられる。子どもも授業で学んだりメディアからの情報も多いなか、「正しい知識がない」という答えが以外に多かった。子どもとしては興味はあっても現実としての危機感がなかなか持てないのではないかとと思う。

* その他の項目

- ・ 大切に思っていることは保護者も子どもも友達・家族が上位をしめた。自分の夢や将来のことという答えが意外に少なく、今の厳しい社会状況が影響しているのかも思える。
- ・ 保護者から子どもに伝えたい思いは数多く出たが、子どもから保護者に聞きたいことは殆ど書かれていなかった。まだ具体的な将来の展望がもてないことや、多くの情報が氾濫していることなどから、聞くことがないというより保護者が聞く対象となっていないのではないのかも考えられる。

《 まとめ 》

話し合いをしていく中で私たちが感じたことの一つは、金銭感覚についても男女交際についても、子供たちがセルフコントロールできる力をもてるよう育てていくことが大切だということです。アルバイトについても高校生の勤労体験自体は決して悪いことばかりではなく、社会や流通の仕組み・収入を得ることの大変さ・違う世代とのコミュニケーションなどを学ぶことは、将来の展望につながっていくこともあるでしょう。男女交際も人を好きになるという気持ちはごく自然なことです。

けれども、アルバイトや男女交際によって、本業である学校生活がおろそかになったり、年齢相応のお金の使い方や交際の仕方を超えてしまうことになれば、逆に子供たちの人生を損なってしまうことになります。ですからアルバイトや男女交際を容認するのであれば、保護者は子どもに何を今一番大切にしなければいけないのかということとを教えるとともに、子供の自己管理する力を育てるという責任を負わなければならないと思いました。

もうひとつ感じたことは高校時代というものが、子供の気持ちと保護者の考えが近くにいなから交わらない時期であるということです。もちろん親と子、大人とティーンエイジャーの意識の相違というものはいつの時代にもくりかえされてきたものです。それでも子供たちは成長するにつれてやがて社会の一員として巣立っていくという図式がありました。しかし最近では、いつになってもなかなか社会の中に入っていけない子どもや理解に苦しむような犯罪を犯してしまう子どもが出てきています。こういった子供たちに関わってきた方の話によると、子供たちの非行も以前は校則や社会のルールに反抗するという反社会的なものだったのですが、今は社会の中に自分の存在をおくこと自体を望まない脱社会的といわれるものになってきているそうです。パソコンや携帯のネットの普及によりたくさんの情報が得られ、様々なサイトにアクセスすれば実際にあうことはなくても友達も得られる。直接人間や社会にかかわらなくてもいられる環境ができてしまう。こういったことが大きな理由の一つだといわれています。

このようなことから私たちは、子どもたちにとって一番身近な共同体であり社会である家庭や学校が、創意工夫をしながら子どもたちとコミュニケーションをとり、人と人とのつながりの大切さを教えていくことの重要性を感じました。そういった意味でも本校で行っているボランティア活動や体験授業は、子どもたちの目を社会に向けるという点で大変有意義なものであると思います。また、家庭においてはやはり子どもと会話をするということが、単純なことではありますが一番大切なことではないでしょうか。なにかと忙しい日常の中で、子どもたちと会話する時間を持つということは大変なことだと思いますが、このアンケートをきっかけにご家庭で話し合う時間をとっていただけたら幸いです。

《 講演 》

「 命の大切さ 」

フリーフォトジャーナリスト

親泊 健氏

* 講師略歴

- 1973年 沖縄県那覇市に生まれる。
- 1993年 高校卒業後、県内離島を旅行しながら撮影開始
- 1995年 在沖米兵による少女乱暴事件を機に写真活動を開始
- 2002年 イスラエル・パレスチナ取材
- 2003年 イラク戦争取材。帰国後に沖縄県内や都内で写真展開催。
- 2004年 戦争終結1年後のイラク・パレスチナ取材
- 2005年 東京・沖縄を始めとする各地で写真展・講演をするかたわら、戦後60年の沖縄を撮影取材中。